

<報告：東北支援 きたかん伝道隊>

報告者・北関東地方連合 石井 努

9月12日から14日まで山形教会において、きたかん伝道隊の働きがなされました。神が呼びかけられ、北関東からは10名東北連合からは3名の働き人がそれにえられました。初日は開会礼拝と交わりをもちながらのチラシ配りの準備です。和気あいあいの中で、印刷された案内を三つ折りにして教会案内に差し込みました。二日目は、礼拝の後、いよいよチラシ配布です。用意された5か所の地図の中からそれぞれの分担を決め、持ち場に散ってゆきました。午前の中候は守られたので汗だくとなり、午後にはわか雨に濡れ、それでも5000枚のチラシを配ることが出来ました。三日目、分級の発題、証や賛美、礼拝の中で奉仕をさせて頂きました。今回は宿泊が教会員のお宅でのホームステイだったので、奉仕に参加して下さった壮年たちは、山形教会員3名の家に分宿をして、より一層親しさを覚えると共に素晴らしい交わりの時を持つことが出来ました。お迎えくださったホストファミリーの御苦労を思い、祝福を祈る思いです。もう何年も一緒に伝道している兄弟姉妹のように交わりが持て、「ここにもバプテストがおられる、神の祝福はここにも溢れている。」と主の御業を感じる事が出来、嬉しい、嬉しい三日間となりました。最後のプログラム

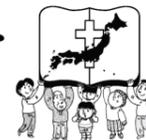
はその日近くの河原で開催されていた山形名物「日本一のいも煮会」見学です。勿論その後の昼食は山形教会の「日本一旨いも煮」皆さんの笑顔と共に美味しく頂きました。9月26日から28日までの三日間は酒田伝道所に4名の壮年を送ることが出来ました。地域へのチラシ配りや開拓伝道の学びを通し東北のご苦労と主の計らいを分かち合い、与えられた善き時を感謝と共に過ごしたと報告がありました。主イエス・キリストの御名を崇めます。全国の壮年の皆様お祈りを感謝します。

この報告は、二つ以上の地方連合壮年会が協働して活動することを条件に全国壮年会連合より5万円の活動費を支援したことに対しなされたものです。(事務局)



全国壮年会連合

ニュース



No.84 2014年12月20日

神学校献金(神学生奨学金献金)
郵便振替 00150-7-669605
日本バプテスト連盟 全国壮年会連合事務局

「奨学金委員会」の生い立ちとその働き 鳥飼 好男 (日本バプテスト連盟全国壮年会連合奨学金委員)



2000年9月15日～16日に開催された第35回「全国壮年大会」(岐阜県羽島市)の総会において、全国壮年会連合(以下壮年会連合)は非常に重要な、そして大胆な決断をした。これは、1976年から推進してきた伝道者養成のための「神学校献金」活動に加えて、西南学院大学神学部学生奨学金支援のための『奨学金制度

④ 奨学金委員会の構成を、連盟・旧規程では、神学部専任教員2名および理事会からの選出委員3名であったが、これを壮年会連合5名、神学部1名、理事会1名に変更する。

これらをもとに、「全国壮年会連合規約および細則」の改定案、「全国壮年会奨学金規程」の制定案等々を作成し、地方連合壮年会等代表者会議、壮年会連合に答申したのである。

の運営』を、連盟理事会からの委託要請を受け壮年会連合の新たな事業として受け入れるという決断であった。総会議場を大きく揺るがす程の大議論と、そして慎重な審議によって「大決断」をしたことを思い出す。(2001年度からの受け入れに対し、賛成77、反対28、保留24)

冒頭の「大決断」後に、早速「奨学金委員会」を壮年会連合役員会のもとに設置し、奨学金委員会の活動が始まったが、まず、会計担当の委員は3日間も連盟事務所で、連盟・旧規程での貸与者および貸与金額と2種要返還金額の帳簿上での精査・整合作業に取り組んだ。約20年間分の整理で、大変な労力を要したことは否めない。

更に、連盟協力伝道活動の大切な柱の一つである「伝道者養成に努め」という働きに対し、壮年会連合は奨学金資金は全て「神学校献金」から支弁するとの決議を行い、責任を持って参与することの意志を示した。

委員長および募集の担当委員は、2001年度神学部入試(10月)にあたり、入学・編入学志望者との面接に臨んだ。以降、4月の入学時と合わせ毎年、面接をするようになり、現在まで継続している。この事は、査定のためではなく不安の中にある神学生への励ましの祈りが主要な目的であり、神学生と壮年会連合との密接なコミュニケーションが図られるようになった。返還担当委員は、連盟・旧規程での返還滞納者30名との面接に東奔西走した。多くの方は、壮年会連合(奨学金委員会)の働きを理解し、即時返還に応じてくれた。しかし、海外留学・在住の方や教会に繋がっていない方々には苦勞した。推薦教会に協力をお願いし、現在のところ連盟・旧規程での返還滞納者は2名となり、その方々との連絡が取れていることを喜びたい。加えて、病気のために伝道者としての働きを断念された方々へ主の導きを祈っている。

この背景は、奨学金必要額と神学校献金額との大きな乖離が続き、過去10年間の「協力伝道基金・資金」からの補填は1億4000万円となり、資金の枯渇が憂慮される状況にあったことが要因であった。当時の貸与神学生数は26名～30名で、毎年1400万円が不足していた。このため、1998年度に連盟理事会は「奨学金制度検討委員会」を立ち上げ、理事3名、神学部1名、壮年会連合1名で構成する委員会を2回開催した。並行して壮年会連合も同年度に理事の出席を求め検討会を行い、1999年に奨学金制度を検討するための「小委員会」設置を地方連合壮年会等代表者会議での協議の後、同年の第34回「全国壮年大会」(横浜市)における総会に提案し議決された。小委員会メンバーは「奨学金制度に関する施行細則」(以下連盟・旧規程)の見直しに着手し、「神学校献金」の状況を鑑み、次の事項について変更が必要と判断した。

- ① 貸与奨学金の2種(生活費)を一旦停止(2007年再開、2009年増額)し、1種(授業料等)のみとする。
- ② 1種奨学金に関し、一定条件下での「全額返還免除」を改め、要返還10%(現規程では20%)とする。
- ③ 奨学金申請の際には「教会総会での推薦決議書」の添付を必須とする。

全国の諸教会・伝道所からの尊い「神学校献金(神学生奨学金献金)」の献げものが、西南学院大学神学部(大学院含む)のみならず、2013年度から東京・九州バプテスト神学校の専攻科や牧師コースの神学生の授業料の一部にも用いられていることも共に喜びたい。これらの神学生は、背後から諸教会・伝道所からの祈りと献げものによって支えられていることを、いつも主に感謝し勉学に励んでいる。奨学金委員会は、皆様の祈りとご協力によって、「伝道者養成」の一翼をこれからも担っていく決意である。

2014年11月現在の神学生奨学金献金・会費実績および対前年度比較

地方連合名	神学生奨学金献金					連合会費				
	2014/11実績		前年同月		対前年額	2014/11実績		前年同月		対前年額
	金額	教会	金額	教会		金額	教会数	金額	教会	
北海道	409,802	9	341,392	9	68,410	42,000	5	55,500	4	-13,500
東北	721,999	9	571,848	14	150,151	67,500	8	65,000	10	2,500
北関東	1,464,392	14	1,305,215	14	159,177	111,000	7	211,500	11	-100,500
東京	1,886,538	24	2,158,725	23	-272,187	130,500	11	237,000	13	-106,500
神奈川	1,599,282	13	1,802,748	12	-203,466	175,500	8	196,500	9	-21,000
西関東	419,354	7	455,800	7	-36,446	43,500	5	57,000	7	-13,500
中部	450,932	6	701,635	8	-250,703	22,500	1	0	0	22,500
関西	528,070	12	641,182	16	-113,112	61,500	5	82,500	7	-21,000
中四国	733,118	14	690,720	14	42,398	54,000	8	105,000	10	-51,000
北九州	605,436	10	700,760	14	-95,324	70,500	6	97,500	8	-27,000
福岡	1,692,010	24	1,781,733	25	-89,723	178,500	16	183,000	15	-4,500
西九州	795,400	10	800,637	9	-5,237	19,500	4	36,000	4	-16,500
南九州	687,240	15	623,773	12	63,467	109,500	8	139,500	11	-30,000
個人団体等	255,619		398,940		-143,321	0				0
総計	12,249,192	167	12,975,108	177	-725,916	1,086,000	92	1,466,000	109	-380,000
対前年比	94.4%	94.3%				74.0%	84.4%			

◎11月末現在、献金、会費ともに前年同月を下回っています。(対前年度比で献金が94.4%(約72万)、会費が74.0%(約38万)です)ぜひお祈りに加えていただき献金増加と共に、充実した連合活動のために連合会費へのご協力をお願いいたします。

<第2回奨学金委員会報告> 開催：2014年11月15日(土) 於)連盟事務所

- 西南学院大学神学部より卒業予定者(大学院6名、専攻科2名、学部4名)の動静について、4名は招聘先と詳細を調整中。他の8名については招聘待機中と大学院進学希望であるとの報告を受けた。
- 10月25日西南学院大学にて2015年度転入・編入学生との面談(合格者7名)を実施。学部での学びだけでなく神学寮での共同生活における学びも重要であるという観点で面接を実施した。
- 2015年度貸与奨学金申請者(在学生分)の審査を実施し、10名の申請者を認定した。

日本バプテスト連盟全国壮年会連合

〒336-0017 さいたま市南区南浦和1-2-4

事務局執務時間:月、水、金 10:00～16:00

☎fax:048-886-7533 http://www.sonnen.net sonnen@bapren.jp

Topics password → sorengo

<神学生の証>



九州バプテスト神学校 牧師コース
2年平原裕子（朝霞キリスト教会）

「もし、人生の最後に聴きたい音楽があるならば」と問われたら、色々な曲を思うでしょう。

それと同じように、意味深い言葉で語られている授業を、今、私は、ほとんど毎日、配信される授業を通して聴いております。

大名クロスガーデンでスクーリングを受けた雰囲気を感じながら、教室の中に臨場して、呼ばれる自分の名前に、「ハイ」と声を出して、仲間入りして、教室の皆と一緒に先生の声に姿に遭遇します。

何よりも、語っておられる先生の日常に触れているということです。ふれあいが希薄になっている現代に、生きた信仰の鼓動を感じています。哀しみにも希望にも、痛みにも、よく効く薬のように、その言葉が効き目を現します。神さまに問う姿、祈る姿、聖書に問い続け、日常の中に神とともに今歩んでいる姿が自分と重なって喜びがもたせまします。逢いたい人々がそこにいます。

旧約聖書の授業は、イスラエルの渾沌とした人々の歴史に、一条の光の様に導く神さまの言葉の力が際立って来ます。

新約聖書は、時を得てメシア願望が叶った人類の歴史における人の反応と現代に繋がる集約を学びとれます。

バプテスト史は、教会と人の歩みがどの様に絡まり、ほぐれ、現代の問題点とかたちになったか考察します。教会形成・礼拝実践・社会福祉・牧師論は、人のありかたが、直接信仰である事を示唆します。

私は、人生の最後にこの授業を受けておりますが、人生の始まりや、途上に受ける事ができれば幸いかと思います。病氣、怪我、多くの哀しみを支える神さまの言葉・聖書の声は、始まり・途上・最後にあっても輝く支えです。教会・人生・人の歩みを概観しながら問われている自分を理解できます。私はこのような学びを支え、祈っていただいている教会の方々に深く感謝致します。

私は、教会の方々の愛と神さまの恵みで牧師コースで学んでおりますが、大怪我に見舞われ、今、家族の不幸に遭っております。そのただ中であって、私を知っているも祈ってくださるスクーリングで会えた学びの友、事務の方々、学びを主導とされる先生方の顔を思い、多くの人びとの繋がりを感ずります。それによってもっと多くの人と神さまは繋がりを広げてくださる確信を学びによって実感できるようになりました。今の仲間と、これからの仲間の人々に感謝を申し上げ、支えられている事をこの九州バプテスト神学校で学びました。私も仲間に入れていただけた事、いつでも仲間を待とうとする教会・学校・聖書の神を熱愛し支えている人々に感謝しています。九州バプテスト神学校で学んだものを生かし、教会で奉仕していこうと思っております。



←九州バプテスト神学校の皆様



国内ミッションスタディツアー参加の皆様 →

<国内ミッションスタディツアー

参加報告>

田矢廣司（堺キリスト教会）

全国壮年会連合でのご奉仕をかれこれ10年近くさせていただいていますが、「教会形成を担う」と「伝道者養成」という壮年会連合の大きな柱をどのように具体化していけばよいのかという課題が与えられました。これらの課題は教会員一人一人の重要な信仰的課題です。壮年会の枠の中で対応している限りは限界があり教会の課題、教会の事柄として動きが始まる必要があると考えます。

教会形成を担うのは教会員という事は、イエス様が始められた宣教の業を引き継ぎ担っているのかが、教会員の一人一人に問われます。教会は献身した信徒によって成立します。私の献身とは、この答えを求めて、今回の旅に参加しました。

聖書にイエス様は町や村を残らず回ってとあります（マタイ9章 35節、4章 42-44節他）これは文字通り、町の隅々まで歩かれたという事です。そうでなければ、当時社会から疎外され、差別されている病を負う

人々との出会いはなかったと思います。このイエス様の働きは、キリストの体なる教会において、教会の働きとして託されています。

この旅を通して、困難な状況の中で教会を守り、伝道の業に働かれておられる皆様にお会いできたことを喜びと共に、敬意を表したいと思ひます。堺教会のメンバーに、富江バプテスト教会の教会学校での学びを通して信仰に導かれた姉妹がおられます。五島の地で撒かれた信仰の種が全国で実を結んでいるのだらうと思わされています。

教会が全国津々浦々に立てられている、その意味を感謝を持って知る事が出来、喜んでます。教会の目的はイエス様が始められた宣教の業を引き継ぎ、担うことです。イエス様が町や村を残らず回られたということは、町々に教会が立てられ、教会となっているということであると思ひます。この旅を通して、教会として立ち続ける御苦勞と喜びを聞かせていただき、この地に富江教会と福江伝道所がありという事は、イエス様が町の隅々まで歩かれ宣教の業に励まれた、その業を担う具体的な証であることに気付かされました。このような機会を与えていただき感謝です。

その4「委」

日本バプテスト連盟常務理事 吉高 叶



2014年度の『バプテスト』誌・神学校週間のアピール文の中で、私は次の様に書かせていただきました。

「一略一 そんな未知の道のりに不安を抱きながら、学び、祈り、導きを待っている人たちがいます。神学生たちです。自分で『必然』を引き寄せることができない時間や環境の中に身を置き、祈る日々。不確定で不安な時間。これこそが、神学校に身を置く事の大切さなのだとも言えます。『あたりまえ』の何一つ見えない時こそが、人間が最も心低くされ、委ねるしかない自分を味わうときだからです。一略一」そうです、「献身者のたたずまい」の大切な一つが「委」・委ねて生きるという姿勢です。今回はこの「委」という文字から献身を捉えてまいりましょう。

■献身者の基本型

卒業年度を迎えた神学生たちとの面接のために、私なりに作成し、学生の皆さんに書いていただいている「履歴書」があります。その中に設けている設問の一つに「赴任地について」という項があります。選択肢は二つです。

<全国どこへでも可能・地域限定

理由： >

西南神学部の学生のみなさんのほとんどが“全国どこへでも可能”に○をつけてくださいます。私は、その○印の重さに心を打たれます。ここに○をつける時、覚悟なさったんだろうなあ、心を定めるためにどんなに祈ったことだろう、と。そして、春の訪れと共に導かれていく「まだ見ぬ道」に、身を委ねようとした彼ら・彼女らの献身に、改めて深い感動と感謝を憶えます。私は、献身者の生き方の基本型は、「主のお入り用」のために自身を委ねるこの覚悟から始まると思ひます。このことを「基本型」として大切にすることこそ、委ねて踏み出してきた伝道者たちを充分に受けとめ、感謝をもって協働していく教会の覚悟と信仰が問われていくのではないのでしょうか。

■出発する人生

聖書が旧約・新約を貫いて私たちに迫っている一つの生き方があります。それは、「出発」することです。自分の計画・設計、自分の造り上げた既得利益、自分のコネクション、そうしたものを背にして、主の御業、主の呼びかけ、隣人との出会いに向かって出発する、そんな生き方です。聖書の登場人物の多くが、この断念と出発を人生に経験しています。断念することを通して祝福を受け、出発することを通して恩寵を身に受けています。そこにはマナが降り、鳥が肉を運んでくる「神の養い」が用意されていくのです。

こうした出発は、故郷に錦を飾るための立志伝でもなければ、次のステージに移る門出でもありません。目的や目標を定めて立ち上がる出発ではなく、「神さまに生きる」「信じ委ねて生きる」という「生き方の転換」のことです。結果、何か偉業を成したか、という事が問題ではなく、ただ神さまを主とし、主のお入り用に向かって生きたという事実そのものが祝福なのです。

■旅路の助け

「目をあげて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか」（詩編121:1）

人生は旅です。旅人は、これから進みゆく山々を見渡し、果たしてそこに何が待ち受けているかを想い、不安と恐れで足がすくみます。「ああ、私の助けはどこから来るのだろうか」。これはまさに人生の問いと言えるでしょう。人生の助けはどこから来るのでしょうか。政府からでしょうか、会社からでしょうか、社会制度からでしょうか。通帳の残高からでしょうか、知人・友人からでしょうか。それらの助けには、必ず条件や打算があり、時には裏切りや罠があります。

「人生の真の助けは、天地と私たちの生命を造られた主のもとから来る。主は、まどろむことなく、私たちの人生に愛と恵みを注いでくださるのだ。」

このことを語り抜き、このことを証しし、人生の旅人である教会員・求道者の一人ひとりの旅路を祝福することが伝道者・牧会者の仕事ではないのでしょうか。伝道者の人生は、生涯を通して「主に委ねて生きる人生の祝福」を証言することです。それゆえ、自らもまた委ねる生き方を闘い取っていかねばならないのです。